

RETAILER ACADEMY NEWS

Jan 2023 | Bentley Motors Japan

2022年の販売台数は過去最高を記録 日本では8.1%増の644台



ベントレー モーターズがこのほど発表した2022年の全世界での販売台数は、前年比4%増の15,174台でした。過去最高を記録するのは2年連続で、相次いでニューモデルを投入したことやマリナーのビスポークに対する需要拡大、そして2030年までに完全な電動化を目指す「Beyond 100」戦略の下で発売されたハイブリッド モデルの販売が好調であることなどが、過去最高の販売台数を達成する原動力となりました。

モデル別の内訳では、ペンテイガが42%を占めてトップの座を堅持。初代の発売から6年が経過しましたが、ラグジュアリー SUVセグメントで圧倒的な存在感を見せ続けています。コンチネンタルGTとコンチネンタルGTコンバーチブルも好調を維持し、販売台数の約1/3をコンチネンタルGTシリーズが占めています。特にパフォーマンスにフォーカスしたコンチネンタルGT Speedの販売台数が、コンチネンタルGTシリーズ全体の31%を占めました。フライングスパーは全販売台数の28%を占め、特にハイブリッドが好調をけん引しました。フライングスパー ハイブリッドはフライングスパー シリーズ全体の

30%を占め、英国に限ればハイブリッドの割合は65%と高い水準となっています。

市場別シェアでは、南北アメリカが28%でトップを維持。中国本土・香港・マカオが24%で続き、欧州が19%で3番目となっています。日本を含むアジア太平洋は13%で4番目でしたが、前年比23%増と全市場で最も高い伸び率を示しました。

なお、日本での販売台数は8.1%増の644台でした。皆様のご協力により、過去最高を記録することができました。今年は完成したモデルラインアップに基づく新デリバティブ戦略により、新たな顧客層へのアプローチなども含め、さらなる販売増につなげていきたいと考えています。ベントレー モーターズ ジャパンとしても、さまざまな面で販売を後押しする施策を展開してまいります。



■ ベントレー モーターズ2022年販売台数

市場	2022年販売台数 (前年比)	2021年販売台数	市場別シェア
南北アメリカ	4,221 (1%増)	4,212	28%
中国本土・香港・マカオ	3,655 (9%減)	4,033	24%
欧州	2,809 (11%増)	2,520	19%
アジア太平洋	2,031 (23%増) (このうち日本は644台)	1,651	13%
英国	1,490 (12%増)	1,328	10%
中東・アフリカ・インド	968 (6%増)	915	6%
合計	15,174 (4%増)	14,659	100%





メルセデス AMG 専用モデルとなったロードスター

メルセデス AMG SL

メルセデス・ベンツ日本は、2022年10月24日に同社のラグジュアリーロードスター「SL」をフルモデルチェンジ。
新たにメルセデス AMG SL としてモデルを発売しました。

SUMMARY

- メルセデス AMG の完全独自開発モデルとしてパフォーマンスとラグジュアリーを両立
- メルセデス AMG が SL 専用に新規開発した高剛性プラットフォームを採用
- F1マシンの最新技術を導入した 2.0L 直列 4 気筒ターボエンジンを搭載
- 従来のメタル製リトラクタブルルーフ「バリオルーフ」に代え、新たに電動ソフトトップを採用
- シートレイアウトは従来の 2 シーターから後席のある 2+2 レイアウトに変更



INTERIOR

- アナログ的な幾何学フォルムと現代的なデジタル技術を融合させた「ハイパーアナログ」インテリアを採用
- 初代 300 SL ロードスターと同様、ダッシュボードから独立し、立体的なパイザーに統合されたフルデジタルの Cockpit ディスプレイを採用
- 1989 年の R129 型 SL 以来となる 2+2 レイアウトを採用。4 人乗車に加え、ゴルフバッグの搭載、走行風の巻き込みを軽減するドラフトストップの装着などが可能
- リアシートには身長 150cm 以下の乗員が乗車可能。チャイルドセーフティシート装着時は身長 135cm 以下の子供が乗車可能
- S クラス / C クラスと同様の MBUX を搭載。11.9 インチ縦型メディアディスプレイはオープン走行時の光の反射を防ぐため、12 ～ 32 度の範囲で傾斜角度の調整が可能



EXTERIOR

- メルセデス・ベンツのデザイン基本思想“Sensual Purity”に AMG 独自のスポーティな DNA を取り入れたデザインを採用
- 従来より長いホイールベースと短いオーバーハング、傾斜の強いウインドシールドにより、スポーティな独自のプロポーションを実現
- 1952 年の 300 SL レースカーをルーツとする AMG 専用グリルをはじめ、初代 300 SL をモチーフにしたディテールを各部に採用
- 電動ソフトトップの採用により 21kg の軽量化と低重心化を実現。外側シェルとルーフライナーの間に防音材を挟み込んだ 3 層構造により、耐候性と快適性、遮音性を向上
- コンパクトに折りたたまれる軽量の Z フォールド形ソフトトップの採用により 213L のトランクスペースを確保。開閉時間は 15 秒。60km/h までは開閉操作が可能



TECHNOLOGY

- 新開発のアルミニウム製スペースフレームと複合材の使用により、重心の低さと高剛性を両立。ねじれ剛性は従来型に比べて 18% 向上
- メルセデス AMG C 43 4MATIC と同じ 2.0L 直列 4 気筒ターボエンジンを搭載。最高出力 381ps、最大トルク 480Nm を発揮
- 量産車では世界初となる F1 由来の電気リック・エグゾーストガス・ターボチャージャーを採用。電動でタービンの回転をサポートすることで低回転域からのレスポンスを向上
- トランスミッションは湿式多板クラッチを用いた AMG スピードシフト MCT 9 速 AT を採用。前後 5 リンク式サスペンションには、新開発の軽量コイルスプリングを採用
- フロントの上部エアインテークに設けられた電子制御式水平ルーバーと、トランクリッド一体型のリトラクタブルリアスポイラーにより、空力性能の最適化を実現



PRICE

メルセデス AMG SL 43

16,480,000 円 (税込)

BRAND STORY

Mercedes-Benz SL



単一モデルのスポーツカーとしては最も長い歴史を持つ「SL」。1963年に誕生したボルシェ 911と比べても11年長い

70年の歴史を持つメルセデスの最高峰ロードスター

今回新たにメルセデス AMG 専用モデルとして生まれ変わった「SL」は、メルセデス・ベンツを代表するスポーツカーとして70年の歴史を持つ伝統のモデルです。そのルーツと発展の歴史を振り返ります。

SLのルーツはレーシングスポーツカー

「SL」とはSuper Lightの略で、1952年に競技用のレーシングスポーツカー「300 SL」(W194)として開発されました。同年のル・マン24時間耐久レースで1-2フィニッシュを飾ったほか、世界各地のレースで輝かしい戦績を上げました。そして1954年にはロードゴーイングモデルとなる「300 SL」(W198)を発表。鋼管を組み上げたマルチチューブラーフレームとガルウィングドアはレースカー譲りで、世界に大きなインパクトを与えました。同時にロードスターボディを持つ乗用車ベースの「190 SL」も発表。リーズナブルな価格で大ヒットとなります。1957年には「300 SL」のフレームを改良し、通常のドアを装着した「300 SL ロードスター」(W198 II)に発展しました。



ガルウィングドアを備える300 SLはメルセデスのスポーツカーを象徴する存在

ラグジュアリースポーツカーの役割を担う

1963年にはロードスターとしての快適性を重視した設計となった2代目のW113型が登場。着脱式ハードトップの凹型の形状がアジアの寺院を彷彿とさせるとして、“パゴダ”の愛称で呼ばれています。1971年には3代目のR107型に発展。新たに8気筒エンジンを搭載したほか、ホイールベースを延長したクーペボディのC107もつくられました。R107型の製造は18年に及び、237,287台ものモデルが生産されました。



R107型は1971年から1989年まで18年にわたって生産されたロングセラーモデル

数々の技術革新をもたらした4代目モデル

1989年に満を持して登場した4代目のR129型では、当時最先端の装備を採用。全電動ソフトトップの採用により、面倒な開閉操作がスイッチひとつで可能になりました。さらにシートベルト内蔵の一体型シート、横転時に自動で展開する世界初のオートマチックロールバーを採用。オープンカーの安全性を高める革新的な装備が特徴的でした。さらに「SL」史上初となる12気筒エンジンも搭載されています。



ロードスターの快適性と安全性を大幅に高めたR129型 SL

クーペカブリオレの「バリオルーフ」へ

2001年には5代目のR230型が登場します。このモデルではソフトトップに代えて金属製リトラクタブルハードトップの「バリオルーフ」を採用。日常的に使えるロードスターとなりました。2012年にはメルセデス初のオールアルミ製モノコックを採用するR231型が登場。大幅な軽量化により環境性能を向上させました。

新たにメルセデス AMGの独自モデルとなった今回の新型では、日本未導入ながら「SL」初となる全輪駆動の4MATIC+、リア・アクスルステアリングなども採用されています。70年に及ぶ「SL」の歴史は、常に革新的な設計で世界をリードするオープンスポーツカーの歴史そのものといえるでしょう。

MULLINER

3Dプリンターによる画期的な製造プロセス
バトゥール、ゴールドのディテール

ベントレー モーターズのビスポーク部門のマリナーが、現在開発テストを行っているバトゥールのインテリアには、純金のディテールが採用されています。これらのディテールを製作するために採用されたのが、画期的な3Dプリンターによる加工です。このプロセスを自動車業界で用いたのは、おそらくベントレーが初と考えられます。アディティブ・マニファクチャリング (AM) とも呼ばれるこの技術により、103年の歴史の中で最速のコーチビルドモデルに、最大210gの18Kイエローゴールドが取り付けられる予定です。

わずか18台だけが製造されるバトゥールは、そのすべてが1台165万ポンド(約2億6400万円)で販売されます。3Dプリンターで作

られるゴールドのディテールはオプションで、スタート/ストップボタンを囲むドライブモードのロータリースイッチをはじめ、ダッシュボードのオルガンストップ ベントコントロールやステアリングの12時の位置にあるインサートマーカーがゴールドとなります。

このゴールドのディテールを製作するにあたって、マリナーが協力を求めたのは、英国・バーミンガムの歴史あるジュエリー街に本拠地を置くCooksongold社でした。この特別なコラボレーションにより、最先端の高度な製造技術と伝統的な素材や仕上げ技術を融合させるベントレーの技術力にさらに磨きがかかりました。

素材である金の地金はすべて、古いジュエリーから100%リサイクルするというサステナブルな方法で調達し、3Dプリンターで使用でき



るようにパウダー状に粉碎されています。2030年までにエンドツーエンドでのカーボンニュートラル実現を目指すベントレーのBeyond 100戦略に沿ったもので、よりサステナブルな未来に対するベントレーのコミットメントを反映し、新たに貴金属を採掘して環境負荷を生じさせないようにしました。

バトゥールの3Dゴールドパーツはすべて、CADモデルによるデジタル設計を経て、レーザー溶融プリンターで印刷されます。印刷完了後は、ベントレーの代名詞でもあるポリッシュ仕上げによるクオリティを実現するため、熟練のジュエラーが伝統的な技法を用いて1つずつ手作業で仕上げていきます。





マリナーが打ち立てた新たな金字塔 2022年に500件以上のビスポークを手掛ける



ベントレーのビスポーク部門のマリナーのデザインチームは、2022年の12カ月間に、世界中のお客様から500件を超えるパーソナル コミッショニングの依頼に対応するという、ビスポークの新たな金字塔を打ち立てました。これらのプロジェクトには、バトゥールなどのコーチビルド、ブローワーなどのクラシックカーの限定モデル、そしてさまざまな魅力的でユニークなお客様ごとのプロジェクトが含まれています。

マリナーのデザインチームが結成されたのは2014年。このチームが1,000件のパーソナル コミッショニング プロジェクトを完了するのに7年の歳月を要しました。2022年に500件ものプロジェクトを達成できた背景には、サテン仕上げのペイント仕上げや特注のカラーリング、複雑なインレイや刺繍といった、ビスポークの創造性に対する需要の高まりを反映しています。



記念すべき500件目は、英国のお客様からの依頼によるフライングスパー S ハイブリッドのパーソナライゼーションです。この車両はブルー系の新色「Spark」が使用されています。エクステリアはブラックライン スペシフィケーションとブラックの22インチ10スポーク スポーツホイールで引き締められています。インテリアは、パネルがグロス仕上げのカーボンファイバー、レザーカラーはベルーガで、ダイヤモンドキルティングが施されており、これらがクロームのエアベント、ダイヤルベゼル、コントロール類の輝きを引き立たせています。シートやフロアマットには、アクセントカラーとしてクラインブルーのレザーを採用。ステアリングの6時の位置のスポークとシフトレバーにもクラインブルーのレザーが使用されており、鮮やかなコントラストをより効果的に表現しています。



<2022年のビスポークの例>

巨大なカジキからインスピレーションを得た コンチネンタルGT



- 米国のベントレー タンバベイからの依頼で製造
- ボディカラーはブルー系パレットのマリンをサテン仕上げ
- スタイリング スペシフィケーションを採用し、地球上で最も速く泳ぐ魚の1つであるクロカジキを連想させるため、追加される各パーツはマリン、モナコイエロー、アーキティカホワイトの3色仕上げ（すべてサテン仕上げ）
- レザーカラーはマリナーホワイト×インペリアルブルーのデュオトーンで、特注のカラーズプリットを採用。シートパイピングはシグナルイエローとし、外装のテーマを室内でも継続
- ピアノマリナーホワイト×ピアノマリンサテンのデュアルヴェニア
- カジキのシルエットの刺繍とインレイ

コントラストカラー控え目の コンチネンタルGTコンバーチブル



- 米国のベントレー ネイブルズからの依頼で製造
- ブラックライン スペシフィケーション
- アークティカホワイトの洗練されたソリッドなボディカラー
- ドラゴンフライブルーのピンストライプ入りスタイリング スペシフィケーション
- レザーカラーはアーキティック×ポーポイズ、アクセントカラーがドラゴンフライで、特注のカラーズプリットで配色
- パネルはピアノドラゴンフライ×ピアノアーキティックホワイトのデュアルヴェニア、ピンストライプはベルーガ

月からインスピレーションを得た 「Ominousコレクション」



- 米国のベントレー タンバベイからの依頼で製造
- 月の光にインスパイアされたベンティガを4台製造
- 新月から下弦の月までの月の満ち欠けをシートの刺繍で表現
- 左右のシートに施された刺繍の月は、左右対称となるようにデザイン
- ボディカラーはチタングレー、マンダリン、オックスフォードブルー、オニクス×ヴァーダントの4種類
- 各ボディカラーにマッチさせた特別仕様のインテリア

GT Speedとバカラルの 1:43スケールモデルカーが登場



ベントレー コレクションに、コンチネンタルGT Speedとバカラルの1:43スケールモデルカーが登場しました。

コンチネンタルGT Speedは、ボディの流麗な曲線と力強さをミニチュアで忠実に再現。印象的なキャンディレッドのボディカラーが、スタイリング スペシフィケーションで追加されるダークティントのディテールを強調しています。インテリアは、ホットスパのレザーカラーに施された「Speed」ロゴ刺繍とダイヤモンドキルティングも再現しています。

バカラルは、ボディカラーがイエローフレームで、サテンブロンズのブライトウェアによってバカラルのドラマチックなキャラクターを一層際立たせています。ラップアラウンド コックピットは、内外装のデザインを調和させ、このモデルカーでは洗練されたグレーのツイードとベルーガのキャビンカラーが採用されています。見れば見るほど、職人や愛好家、コレクターを興奮させ満足させる複雑な模様やディテールが見えてきます。

いずれのモデルカーも、シックなベントレーの化粧箱に入れてお届けします。

ベントレーがコミュニティ支援を継続



ベントレー モーターズは、社会的および経済的に困難な時期に地域社会を支援するため、Covid Impact 基金の下で昨年も引き続き11の主要な慈善団体に計164,000ポンドに上る支援を行い、対象者5,000人以上を直接的に支援しました。

この基金は、長年のパートナーであるチェシャー・コミュニティ財団（CCF）と協力して2021年に立ち上げたもので、新型コロナウイルスの拡大により深刻な影響を受けた人々を支援するための、ベントレーの長期的な企業理念を推し進めるものです。ベントレーはこれまで、NHSや介護施設、地域の慈善団体を含む260以上の組織に9万セット以上の防護用具を寄贈してきました。2021年にはこれらの活動を一歩進め、地域コミュニティと協力してパンデミックの長期的な影響に焦点を当て、Covid Impact 基金を設立しました。この基金は、食糧難、メンタルヘルス、経済面での相談や教育など、危機的状況にある主要な社会問題に取り組む目的で、継続的にクルーの多くの慈善団体を支援しています。

ベントレー モーターズのガバメントリレーションズ& CSR ディレクターのサリー・ヘプトンは、「人と地域社会は、ベントレーの長期的成功に不可欠であり、地域社会の生活向上のためにベントレーの事業が確実に機能するようにしたいと考えています。Covid Impact 基金によって多くの方々に支援できたことを嬉しく思います」などとコメントしています。

マリナー&モータースポーツ責任者に アンサール・アリ氏が就任



ベントレー モーターズはこのほど、マリナーおよびモータースポーツ部門のディレクターにアンサール・アリが就任したことを発表しました。組織改編の一環として、アリ氏が率いる部門はエイドリアン・ホールマーク会長兼CEOの直轄部門となることも同時に発表されました。お客様のパーソナライゼーションに対する需要が大幅に増加するなか、アリ氏は再編成されたマリナー部門で陣頭指揮を執ることになります。

アリ氏は自動車業界で30年のキャリアを持ち、マクラレンのスペシャル オペレーションズでマネージング ディレクターを務めていました。それ以前は、フォード、ロータス、ケータハムで上級管理職を歴任し、ゼノス カーズの共同設立者の1人でもあります。

ホールマーク会長は、「マリナーは自動車のデザインと専門技術の最高峰を代表する組織であり、ベントレーの特徴であるコレクション、コーチビルド、クラシックの3部門で記録的な需要の高まりを受けている中でアリ氏が加わることになりました。彼の豊富な経験、特に少量生産で高度なカスタムメイドというお客様主導の部門を率いた経験は、マリナーを超一流のビスポーク部門としてさらに強化し、ベントレーのビジネス全体に大きく貢献してくれることでしょう」などと期待を語っています。

なお、アリ氏の前任だったポール・ウィリアムズは、マリナーのチーフ テクニカル オフィサーに就任し、チーフ オペレーティング オフィサーにはボブ・マーティンが就任することも発表されました。

Bomber for ベントレーの新作が登場 「ICE エディション」のスキーやポールなど



高級スキーブランドのBomber Skiとベントレーのコラボレーションとして、2022/2023年の新作が登場しました。「ICE エディション」のスキーは、ストックやヘルメットとともに最高品質の素材を使用しています。

ベントレーとBomber Skiは、パフォーマンス、精密さ、比類なきラグジュアリーさを追求するという共通点があることからコラボレーションが実現。Bomber Skiは、スピード、操縦しやすさ、エレガントさに重点を置いた究極のスキーを開発しました。

2022/2023年の新モデル「Bomber for Bentley ICE エディション」は、ホワイトとグレーのハイポリッシュ仕上げで、真鍮とポリッシュ仕上げのニッケルを使用した6個の3D ダイヤモンドインサートがダイナミックな美

しさを表現しています。

ICE エディションは200組限定で製造され、Bomberの特徴である木製の芯部材のサンドイッチ構造を採用し、最適な柔軟性を実現するとともにチタンやファイバーグラスなどの素材を使用しています。

2022/2023年コレクションでは、Bomber for ベントレー スキーポールをアクセサリーとして追加できるほか、こちらも新作の軽量ヘルメット「Bomber」も発表されています。いずれも最先端の素材やエコレザーなどのサステナブルな素材が使用されており、ユーザーの能力を最大限に引き出したり安全性を最大限に高めたりできるよう、細心の注意を払って設計されています。

カーボンファイバー（CFRP）の基本

クルマの素材として徐々に利用を増やしているのがカーボンファイバー（CFRP）です。
その素材としての特徴や金属との違い、そして製造方法などを紹介します。



カーボンファイバー（CFRP）って何？

カーボンファイバー（CFRP）は、繊維強化プラスチック（FRP：Fiber Reinforced Plastics）の一種です。プラスチックに炭素（カーボン）繊維を加えることで、プラスチックを強化した複合素材となります。カーボンファイバー（CFRP）の特徴は、「軽く」「強く」「硬い」こと。そして「耐腐食性（錆びない）」「耐薬品（薬品に強い）」「電気を通す」という特長も併せ持ちます。「軽さ」は、鉄の4分の1、アルミの約3分の2。「強さ」は比強度で鉄やアルミ合金の10倍以上。「硬さ」は、比弾性率で鉄やアルミ合金の5倍以上もあります。

また、金属は「等方性」と呼んで、どの方向にもクセがないのに対し、カーボンファイバー（CFRP）は、強化材の繊維方向によって性質が異なる「異方性」があります。また、金属は一定未満の力を加えると元に戻りつつ、一定以上の力を加えると折れたまま元に戻らない「弾塑性」を持ちますが、カーボンファイバー（CFRP）は元に戻ろうという「弾性」となります。接合は金属の場合は溶接となりますが、カーボンファイバー（CFRP）は接着します。

■ カーボンファイバーと金属の違い

	カーボンファイバー（CFRP）	金属
性質	<div>異方性</div> 強化材の繊維方向によって性質が異なる	<div>等方性</div> どの方向にもクセがない
	<div>弾性</div> 外力によって変形したとき、外力がなくなると元に戻ろうとする	<div>弾塑性</div> 降伏応力以下の力を加えると元に戻り、降伏応力以上の場合は元に戻らない
接合	接着	溶接

■ カーボンファイバーの特徴

軽い	比重は鉄の約4分の1、アルミ合金の約3分の2
強い	比強度は鉄・アルミ合金の10倍以上
硬い	比弾性率は鉄・アルミ合金の5倍以上

カーボンファイバー（CFRP）の応用例

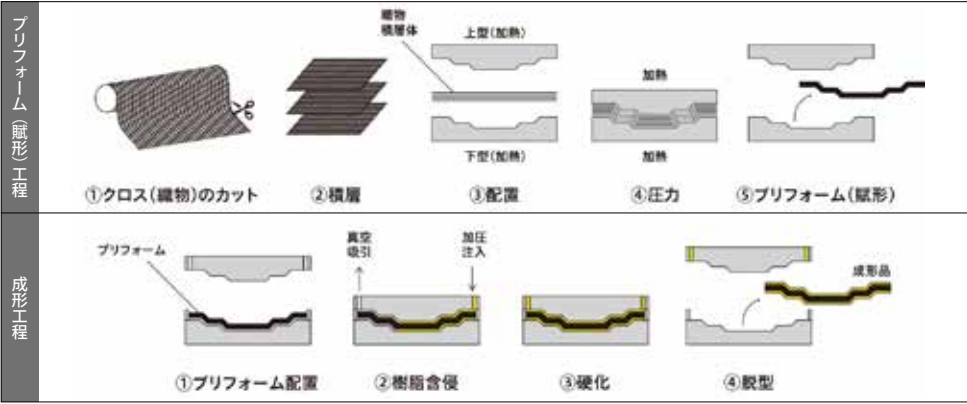
軽く強いカーボンファイバー（CFRP）は産業用の素材として、利用が年々拡大しています。自動車用であれば、ボディ外板をはじめ、プロペラシャフト、バックドアなどに利用されています。FCV（燃料電池車）の水素ポンペンにもカーボンファイバー（CFRP）が使われています。また、旅客機の機体や風力発電の風車、高速鉄道の車両、建築物など、幅広い産業でカーボンが採用されるようになっています。



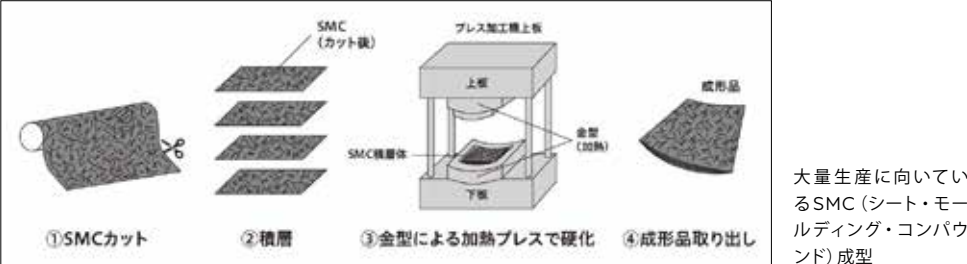
クルマの外板だけでなくFCV（燃料電池車）の水素ポンペンなどにもカーボンファイバー（CFRP）は使われています。

カーボンファイバー（CFRP）の製造方法いろいろ

カーボンファイバー（CFRP）を成形するには様々な方法があります。元となる炭素繊維は、ポリアクリロニトリルや石油系のピットなどの原料から糸が作られ、それを繊維化します。その炭素繊維を樹脂とあわせて成形するのに「オートクレーブ成形」「RTM（レンジ・トランスファー・モールドイング）成形」「プレス成型」「SMC（シート・モールドイング・コンパウンド）成型」「射出（インジェクション）成型」などが存在します。基本的な成型方法としては、オートクレーブ（圧力釜）となりますが、これは1つの製品を作るのに数時間単位の時間がかかります。量産品に向いているのが、金型を使う「RTM（レンジ・トランスファー・モールドイング）成形」や「プレス成型」「SMC（シート・モールドイング・コンパウンド）成型」となります。強度が落ちますが小さな部品を数多く作るのには、ペレット状のカーボンを使う「射出（インジェクション）成型」が向いています。



クルマのルーフ（屋根）などのパネル状に向いているRTM（レンジ・トランスファー・モールドイング）成形



画期的なベンティガ用カーボンホイール

2021年、ベントレーのビスポーク部門であるマリナーは、ベンティガ用の22インチのカーボンファイバーホイールを発表しました。これは、厳しい基準のTÜV（技術検査協会）の全テストをパスした史上初のカーボンファイバーホイールとなります。アルミホイールと比べて1本あたり6kgもの軽量化を実現しました。また、破損するときは、繊維の折り目が離れて開口部ができるため、空気は徐々に抜けることになります。そのため破損したとしても、すぐにコントロールを失うことはありません。高い剛性とパネ下重量の軽減、高い安全性能を実現しているのです。



厳しい技術検査協会のテストをクリアしたベンティガ用22インチのカーボンファイバーホイール。